

<研究ノート>

制度論の位相と制度設計——「制度」の把握についての覚書

鈴木 芳 徳

1. 三木清の構想力における「制度」論

経済社会における制度というものをどのように把握するか、このように課題を設定してみよう。古来、制度論はそれなりの歴史をもっている。例えば、新カント派は、それより前のカント派が、ものそれ自体の存否に関わる認識を疑いの目でみたのとは異なり、制度の存否を疑いの目をもってみようとした。わが国では、三木清の一連の作品がそれである。三木清の制度論は、昭和12年から18年にかけて『思想』誌上に研究ノートとして書き継がれたものであってその表題と発表年代は次のようになっている。

神話（昭和12年）

制度（昭和13年）

技術（昭和14年）

経験（昭和14年～昭和18年）

これらのうち、神話、制度、技術の項は、昭和17年、岩波書店から『構想力の論理 第一』として出版された。したがって、ここでは、この書物として出版されたものを取り上げて紹介し、検討する。

三木清の華麗な文章から論理的な筋書きを引き出すのはかなり難しいので、ここでは上記「制度」の部分から、定言命題の如くに描かれた刮目すべき文章を摘記することにする。

「あらゆる制度は先ず擬制的性質を具えている。」(92頁)「(第一に,)先ず制度はヴァレリーの意味における convention もしくは fiction である。何らの擬制的性質を有しないような制度は存しない。そしてそれはまた convention という語自身が示す如く、多数の人間のあいだにおける一致、同意乃至約束を意味し、従ってつねに社会的性質のものである。」「(第二に)制度は、一般に慣習と呼ばれるものの多くが普通に contume という語をもって表される如く、或る習慣的なもの、延いては伝統的なものである。」「convention が擬制の意味において或る肆意的なもの、自由なもの、そしてロゴス的なものと見られるに反し、contume は或る自然的なもの、必然的なもの、そしてパトス的なものと見られ、制度はかようにして或る習慣的乃至伝統的性質を具えてい

る。」(91頁)【擬制性, 社会性】

「擬制は本能の作りうるものでなく、反って知性の産物である。神話がものであるのに反して、制度は一層知的なものであり、神話の神秘性に対して制度の知的性質を挙げることができる。問題は、かように知性といわれるものが果たしていかなるものであるかということではなからぬ。」(93頁)「いま制度が擬制的なものであるとするならば、その点においてすでに制度の知性は構想的でなければならぬと考えられるであろう。或いは一般に擬制的ないし仮説的に働きをうることが知性の一つの重要な盗聴であり、その点においてすでに知性は構想力と結びつくことができ、事実その場合知性は構想力と結びついていると考えられるであろう。制度の知性の根底には構想力がある。構想力なしには制度の発達はいえぬ。」(94頁)【犠牲的, 知性, 構想力】

「すべての制度的なものは慣習的なものである。しかしそれだけでは制度の規定としては不十分であることを免れない。初めに述べた如く、制度は第三にノモス的な即ち法的な、規範的な性質を具えており、これが寧ろ制度の本質的な規定であると云われるであろう。否、慣習そのものが既に制度の一つであり、ジッテ (Sitte) ——それから sittlich (道徳的) という語はでてくる——の意味において或る規範の、命令的性格を担っている。」(117頁)【制度の規範性】

「制度はつねに人間を、即ち決して単に客体的なものと見ることできぬ主体的なものを対象としている。それ故に制度の技術は自然を対象とする技術とは異なり、一層多く構想力に属しなければならぬであろう。科学的技術の如きものが固有の意味における技術であるとすれば、制度の技術はかような技術に止まらず、タクトという意味を含まねばならぬ。タクトも一種の技術ではあるが、それはいわば客体的技術に対する主体的技術を意味している。ラヴェッソンは意識の完全なタイプを現す努力はタクトであると云ったが、制度の技術は単なる技術でなくてタクトでなければならぬ。それが広義において政治的であると云われるのもそのためである。政治は他の意味と共に就中タクトという意味を含んでいる。政治の科学性ないし技術性を考えるに当たっても、この点を忘れてはならないであろう。主体的技術であるタクトには純粹に合理的な思惟のみでなくて構想力がとくに要求される。もとより制度の創造に合理的な思惟が必要でないというのではない。制度は社会の自己自身に対する適応を意味すると同時に、他方環境に対する適応として存在するのであり、かかるものとして客体的技術を含むことが必要である。」(165頁)【合理的思惟と構想力, タクトと政治的なもの】

「かようにして制度は技術的に作られるといっても、それが道具或いは機械の如きものとは異なるのでなければならぬ理由は明らかにされ得る。自然を支配するための道具がリアルなものであるとすれば、制度はフィクショナルなものである。しかもフィクショナルなものがリアルであるというのが歴史の世界である。制度は社会が自己自身に与える構造であり、かかる構造なしには社会は存立しえない。制度は主体が自己自身に与える秩序として単なる道具以上の意味を有している。社会はフィクションの建物である。そして既に述べたように、環境に対する適応の仕方

が本能的直接的であることから技術的間接的になるという方向へ進むに従って、かく働きかける主体であるところの人間を制度的に結合し組織する仕方も発展し、フィクションの支配もそれに応じて発展するのである。自然的環境は社会の身体であるとも考え得るように、科学も科学的技術も、あらゆるものが歴史の世界においては制度の意味を有し得る。フィクションはイリュージョンのことではない。歴史の世界においてはリアルなものがフィクショナルであり、フィクショナルなものがリアルである。」(167頁)【リアルなもの、フィクショナルなもの】

(引用は、三木清『構想力の論理 第一』岩波書店 昭和14年 によっている。また【 】内は、引用者によるもの。)

さて、以上のように見てくると、私たちは、銀行「制度」、証券「制度」、会計「制度」、財政「制度」等々の言葉をかなり安易不用意に使用しているのではないか、そこに言う「制度」の本質的な意義を省みることなく用いているのではないか、という反省に迫られざるを得ない。しかし、その場合、三木清の言うところを直ちに援用できるかという点必ずしもそうはいかない。何故なら、三木清の場合には、「制度」が「構想力」との関わりに重点を置いた形で検討されているという独自性を持っているからである。すなわち、三木清においては、行為するものとしての、人間存在の超越性へと全ての議論が収斂されてゆく。したがって、いかに制度の本質に迫るところがあったにしても、経済社会における制度を個々に議論するにはかなりの距離がある。(三木清の『構想力の論理 第一』『構想力の論理 第二』の両者を併せて一書として最近翻刻されている。すなわち、大峯顕『三木清 創造する構想力』燈影舎、2001年、これには大峯顕氏による解説が付されていて有益である。)

こうして、「制度」の本質について、三木清に学んだ私たちとしては、もっと経済社会そのものに内在的な形で議論を進める手法へと議論の場を移動せざるを得ないのである。

2. 社会的共通資本 (social overhead capital) における「制度」資本の意義 (宇沢弘文)

宇沢弘文は、後にやや詳しく見るように、社会的共通資本を3つに分類し、その中に「制度」資本を位置づけようとする。この見解を取る論者は多数あるが、ここでは最近における宇沢の論稿を対象として取り上げる。宇沢の論稿は数多く存在するが、ここではそれらの中で比較的簡明率直に記述されたものを対象として扱い、専らそこから引用しながら考えることにする。また、経済学史ないし思想史におけるその意義については、ここではふれないものとし、むしろ制度資本の「機能上」、「機構上」の扱いに重点を置いて考察する。

古典学派ないし新古典学派においては、経済を、(A) 国防、司法を専らとする政府、(C) 民間ないし私的部門、という2つの部門に分けて考えるのが通常である。これに対して、(B) 社会的共通資本の世界を必須不可欠のものとして加える考え方がある。宇沢は、この見地を唱導する。

さらに、この (B) 社会的共通資本を3つに分割して考える。すなわち、

(B) —— (1) 「自然環境」= 大気, 森林, 河川, 水, 土壌の如き。

(B) —— (2) 「社会的インフラストラクチャー」= 道路, 交通機関, 上下水道, 電力・ガスの如き。

(B) —— (3) 「制度資本」= 教育, 医療, 司法, 金融制度の如き。

これらについての説明を追ってみよう。

「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味する。社会的共通資本は、たとえ私有ないしは私的管理が認められているような希少資源から構成されていたとしても、社会全体にとって共通の財産として、社会的な基準にしたがって管理・運営されるものである。社会的共通資本はこのように、純粋な意味における私的資本ないしは私的希少資源と対応されるものであるが、その具体的な構成は先験的あるいは論理的基準にしたがって決められるものではなく、そのときどきの自然的、歴史的、文化的、経済的、社会的、技術的諸要因に依存して、政治的なプロセスを経て決められるものである。」「社会的共通資本はこのように、分権的市場経済制度が円滑に機能し、実質的所得分配が安定的となるような制度的諸条件を整備しようとするものである。」(宇沢弘文「社会的共通資本と金融制度」, 宇沢弘文・花崎正晴編『金融システムの経済学』東京大学出版会, 2000年, 4頁)

なかでも金融制度を中心とする制度資本は、重要な役割をになっている。次にそのことが指摘されている。

「社会的共通資本はいずれも、市民の一人一人の人的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持し、産業の発展と経済循環の安定化をはかるために、不可欠な役割を果たす。とくに産業の発展と経済循環の安定化という観点からは、金融を中心とする制度資本が重要な役割を果たす。」(同上, 5頁)

また、それぞれの分野における職業的専門家の専門的知見によって管理・運営されるべきものであって、官僚的基準や市場的基準のみによって管理・運営されるべきものではない、として、次のように述べられている。

「社会的共通資本は決して国家の統治機構の一部として官僚的に管理されたり、また利潤追求の対象として市場的な条件によってのみ左右されてはならない。社会的共通資本の各部門は、それぞれの分野における職業的専門家によって、職業的規範にしたがって、管理・維持されなければならない。とくに、金融という、高度に専門化し、経済的、社会的、政治的要素ときわめて複雑に交錯している社会共通資本の場合、その職業的規範を明確に定義し、金融にかかわるさまざまな市場について、その構造的、制度的条件を整備し、経済循環の安定することは至難のことである。しかも、金融制度が国際的な広がりをもつとき、この問題の困難度はいっそうたかまるも

のといわざるをえない。」(同上, 15頁)

また, 社会的共通資本のありようは, それぞれの国の経済的・社会的構造を規定する。この指摘は各国金融制度のもっている意義を考える上で重要な示唆を与えるところがある。

「社会的共通資本が具体的にどのような構成要素からなり, どのようにして管理, 運営されているか, また, どのような基準によって社会的共通資本自体が利用されていたり, あるいはそのサービスが分配されているかによって, 一国ないし特定の地域の社会的, 経済的構造が特徴づけられる。」(宇沢弘文「やさしい経済学」日本経済新聞, 2005年1月6日, 「社会的共通資本の時代」) この叙述は, フランスのレギュラシオン派の主張するところと遠くで響きあうものをもっている。ところで, このように各国における差異を想定するということは, 歴史的にみても絶対普遍の類型があるのではなく進化の過程を経ることが想定されているということのようである。宇沢は, その著書の冒頭にアーロン・ゴードンによる発言を掲げこれをもって制度学派の考え方の要約としているからである。すなわち「すべての経済行動は, それぞれの経済主体が置かれている制度的諸条件によって規定される, と同時に, どのような経済行動がとられたかによって, 制度的諸条件もまた変化する。この, 制度的諸条件と経済行動との間に存在する相互関係は, 進化のプロセスである。環境の変化にともなって, 人々の行動も変化する。と同時に, 行動の変化はまた, 制度的環境の変化を誘発することになり, 経済学に対して, 進化論的アプローチが必要になってくる。」(宇沢弘文・国則守生編『制度資本の経済学』東大出版会, 1995年, 1頁, プロローグから)

既に触れたように, ここでは普遍性をもつものとしての経済理論から解放されたものとして経済制度がとりあげられている。もっとも, 宇沢の場合には, なお経済理論との関連性が議論の中に包み込まれており, その点は注意しておく必要がある。

こうして経済理論の緊縛から離れて, 意識的に経済制度論を展開したものとしては, フランスのレギュラシオン派の考え方がある。とりわけ極く最近刊行されたR. ボワイエの『資本主義 vs 資本主義』(山田鋭夫訳, ただし原題はこれと異なるが, 絶妙の日本語訳表題である)は, この点を正面から捉えようとしたものであって, アメリカ資本主義だけが資本主義であるのではないことを明確化しようとした好著である。そこでは, かつての強力な主張であった, フォーディズムの国としてのアメリカの映像は姿を消し, 「金融や資産価格が経済をリードする国として, 世界の中でもきわめて例外的な国として登場」し, 「そこではアメリカは他の多くのアングロサクソン諸国とともに, 市場主導型という特定の資本主義類型として, 大陸欧州や日本とは大きく異なったものとして, その相貌を現すことになった。」(邦訳者による解説。訳者あとがき, 304頁, また, 「朝日新聞」2004年12月19日付け, ロベール・ボワイエの寄稿を参照。)

こうした制度論を重視する考え方は, 何もレギュラシオンのみでなく, 近年に至って様々な方面で現れるようになった。例えば, 内藤純一『戦略的金融システムの創造』(中公双書, 2004年)

は、その「はしがき」によると、一国の金融「システム」と経済とのかかわりとを問題とするものであって、従来の経済学によれば経済の安定化は「マクロ経済学」の領域とされ、マクロ経済運営の巧拙が結果を決めるかに考えられてきた。しかし、ほんとうに問題なのは、「金融の1930年代モデル」という「レジーム」、すなわちひとつの時代を支える「経済的体制や制度そしてその理念、目的」こそが問題の焦点なのである。(同書、2頁) このように、この書物では、例えば新古典派の経済理論の是非を問うのではなく、「レジーム」の当否を問おうとするのである。

3. 経済理論と経済制度

確かに従来、普遍的な経済「理論」が、一国経済のあり方を決めるものと専ら考えられてきたふしがある。しかし、特に新古典派経済学が登場し、一世を風靡するようになって、その欠点や不備がかなり決定的なかたちで指摘され、普遍的経済理論に全面的に従って経済運営することの危うさが知られるようになった。

さきの内藤純一は、次のように述べる。「多くのエコノミストたちは、新古典派理論を前提にして、自由化や規制緩和は金融市場や経済を効率化させ、また安定させるはずだと説いたが、この点は、90年代以降の現実と向かい合ってきた実務家たちの実感とは大きく食い違うものであった。」(内藤純一、前掲書、まえがき、3頁)

また、ジョセフ・スティグリッツ (Joseph Stiglitz) は、「市場原理主義者たち (market fundamentalists)」という用語を使って事態を説明し、この章を「収奪者たちの論理」と名づけている。(鈴木主税訳『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』徳間書店、200頁、原題は、*Globalization and its Discontent*, 2003, p. 287)

しかし、そこには何層にもわたる困難がある。そもそも普遍的な「経済理論」と切り離れたかたちの「経済制度論」などというものが可能か。「経済制度」なるものは、その時々自由に選択可能なものか。「経済制度」と「経済理論」との関連性はいかなるものであるべきか。そこから新しい経済理論が生み出されてくるか。

問題の中枢には、未だ到達していない。というのは、最近における「制度経済学」の進展には見るべきものがある。またいわゆる新古典派経済学におけるプロセスとしての競争「過程」についての検討はなお、詳述されねばならないものである。さらに、三木清におけるような制度論への接近が、われわれが問題にするような経済制度論とどう接合するものかについても、詳述を要するところである。

(補注) 本稿をなすにあたり、黒木亮「経済理論の普遍性と経済制度の複雑性」(『独協経済』79号) から学ぶところが多かった。また、三木清の制度観については、津守和弘教授のご講演から多くを得ている。御礼申し上げたい。